

# 社会的役割を担う住宅

鈴木絵里加 (University College London, Bartlett School of Architecture)

公共性——広く社会一般に利害や正義を有する性質 (広辞苑より引用)

## 序文

近代、住宅は“個”のための建築として考えられ、個人レベルでの欲求を満たす器としての機能を発揮してきた。今更、町屋形式の住宅事情に戻ることは難しく、自分の生活の一部を他人に晒すということへの現代の日本人の抵抗力は著しく落ちている。それでも昨今、ヨーロッパでは現在も頻繁に行われているフラットシェアに習いシェアハウスなるものが東京R不動産の物件 (fig.1) などでも扱われるようになった。各個人にプライベートな部屋が与えられ、その上でキッチン、バス、トイレを共有する。宣伝文句は「個人アパートでは実現できないエクストラスペース」。フィットネススペース、ラウンジ、プールバー、シアタースペースなどの住人間の“公共の場”が提供される。



私たちは公共という言葉に弱く、その言葉は私たちに“ある場所をみんなで使う”ことを想起させ、なくてはならない、または欲しいものだと思ひこませる。マンションを建てる時には公共の公園が設けられ、再開発ビルにはみんなが憩うことのできる広場がある。しかし、私たちは“自分の場所” (例えば自分の部屋など) が誰かに使われることには不快感を覚えるし、また自分が“誰かの場所” (例えば人の家のキッチンやトイレなど) を使う時にはどこことなく違和感を覚える。私はここにこれからの公共性を考えるヒントがあると思う。根本的に“公共性”を何か (例えば公園や広場など) に与えるとき、みんな“個”を捨てる気などさらさらないのである。我々はわざわざ江戸の町屋を経て、障子で区切られた51C型住まいを経て、やっと厚さのある壁で隣の部屋との境界を獲得したのに、公共性という大きな題目のためにその壁を取り除いて他人に自分の生活領域を晒すことも、ましてや他人の生活をのぞき見ることもしたくないのである。

上記のような論理で考えるとこれからの住宅の公共性を考える上で“個”ための空間は少なくとも現在のレベルで、もしくはそれ以上で確保しなくてはならなくなる。そこで、この論文を通して以下に定義した公共性を考えてみようと思う。

これからの住宅の公共性——個々の住宅が公共性を担うことで社会全体が公共の場となる性質 (本論文における定義)

## 住宅の社会的役割

ひとつひとつの住宅が住宅という枠を超えてそれ以上の意味を持ち始め、社会全体のために役に立ち始めることが本論文で定めた公共性の実現に必須であると考えている。言い換えるならば、個々の住宅に意味を持たせ、その集合体がより大きなグループを形成し、さらにその集合体が社会全体を構成する。現在の社会もこのように構成されていると思われがちであるが、実は隣の鈴木さんが佐藤さんに変わったところで私の生活には変化がない。一つ一つの住宅に誰が住むのかは極めて重要ではなく、そしてまたその存在意義も希薄なのである。ここで述べている個々の住宅に意味を持たせるとは、その住宅の存在が消失したら社会が回らなくなる、というレベルにまで住宅の価値を上げる話をしているのである。つまりは住宅が社会を支えるコマの一つになる、社会的に意義のある役割を持つことになる。

これは“公共性”以外の何物でもない。またここで使用している“社会”とは向こう三軒両隣のレベルから日本全体など大きなものでもよい。しかし話はまず小さいものから大きく膨らます方が分かりやすい。次に設計の提案を挙げていかに住宅が社会的役割を担う可能性があるかを示したいと思う。

## 設計提案

### 概要

住宅の公共性を考えるようになったきっかけは、ロンドン、グリニッジのテムズ川沿いの養老院に増設提案をしたことに始まる。Trinity Hospitalと呼ばれるこの養老院は1613年に建設されてからその用途を変えずともグリニッジ発電所の巨大な壁を前に静かに佇んでいる。ここに住む20人前後の老人たちは毎日のルーティーンを決められ、それに従って行動し、自由時間は敷地の中の庭で日向ぼっこをしたりして同じような生活を毎日淡々と送っている。入居資格は65歳以上、グリニッジ在住歴が4年以上で所得がある一定以下。西にあるマリータイムミュージアムはもとイギリス女王の住居を海軍のための博物館にした人気の観光地。東は発電所からそれ以東に砂糖の精製所など工業地帯が始まる。養老院はその存在に気づくこともできないほど本当に小さな目立たない存在なのである。

fig.2



ケーススタディーとしてここで暮らす高齢者達にもう一度、社会とつながることができる趣味

的楽しみを得てもらうために、五塔の煙製所兼住宅の増設提案をした。趣味的、と述べたがこれは労働を趣味的に行うことを意味している。昨今ライフスタイルの多様化により建築は一つの用途としてのみ存在することが非常に難しくなった。用途と形状が現在の価値観では一致しない建築が増えることが必要不可欠なのではないかというのが私の考えるこれからである。また、サステイナブルな観点からも同じことが言える。以前の用途とは別の用途がコンバージョンの後にもたらされる例は多い。住宅の形態をしたオフィスが、工場の形態をした住宅が出てくるのも時間の問題であると私は考えている。



fig.3 五塔という要素+煙製所に必要なプロセスの一つを担っているところである。それぞれの塔には名前が付いている。

- ・魚塔 (魚をさばく大型キッチンがある)
- ・給水塔 (煙製のプロセスに必要な水を全て貯めている)
- ・塩貯蔵塔 (魚を漬け込む塩のため、下部に塩水を貯めるタンクがある)
- ・ウッドチップ塔 (スモークのためのチップを用意する)
- ・煙製塔 (最終的に魚はここで煙製になる)

それぞれの塔には一人が住めるための設備が整っている。(キッチン、ダイニング、バス・トイレ、書斎、寝室など) そしてさらに、各塔の名前が示すようにひとつ一つの塔に別々の煙製プロセスを行うための空間が設置されている。それぞれの塔は住宅としては独立した形態であるにもかかわらず、その存在意義は5塔で一つな

のである。どの塔が欠けても燻製のプロセスを終えることはできないし、また各塔の住人は全体のために働かなくては燻製所という小さなコミュニティーが崩壊してしまう。住宅が公共性を持ち始めるのではなく、住宅が住人に公共性を求める。住人はコミュニティー（この場合は五塔）の一員として社会全体（この場合は燻製所）が公共的な場所になるよう生活する。また社会は個人の動向に大きく左右される。仮に燻製塔の住人が病気になる、その他のプロセスも休まざるを得ない。社会全体の公共性が増すと、個人の存在意義、重要性も増すのである。

### 各塔詳細

各塔の自宅部分は外部からの干渉は一切ない。よって他人から干渉されることはない。またモダニズム的な大きなガラスの連続窓などもない。工業的な色を強く残したせいもあるが閉鎖的でプライバシーは保たれている。しかし、ここでは個人の“住宅”というイメージを変えるべく、工業的なスペースが日常生活スペースの中に入っていくように、またその逆も起こるような設計をした。“生活”という概念が住宅という箱にとらわれず、その他の行為も受け入れる。これも個人の中の公共性が増していくことにつながると私は信じている。

#### ・魚塔

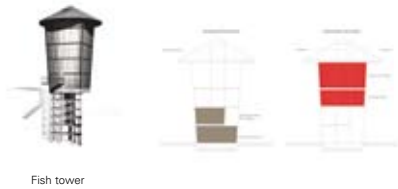


fig.4

魚の下処理をする場所。五塔の中心に存在する。船から魚の上げ下ろしが楽にできるようテムズ河に突き出ている。魚の下処理は時間を要するため、この塔には共同の大きなキッチンが存在する。外部からの手伝いの人々は中心にあるエレベーターにて地上階に到達する。

外部からの手伝いの人々は中心にあるエレベーターにて地上階に到達する。

#### ・給水塔



fig.5

燻製のプロセスにおいて大量の水が必要になる。給水塔は塩水を作るための塩貯蔵塔のタンクにパイプで直結している。住人は水質の管理や水圧調整などを行う。居住スペースが塔の

様々なレベルに点在する。

#### ・塩貯蔵塔

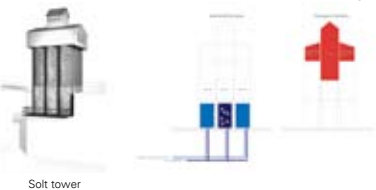


fig.6

魚の腐敗防止及び下味のために魚を塩漬けにしたり、塩水に浸すのは古くから伝わる燻製技術である。住人は塔の下部にあるタンクの塩水の塩分調整や、塩の保管などを仕事とする。住宅部分が作業部分へと浸入してきているのがダイアグラムからみられる。

住宅部分が作業部分へと浸入してきているのがダイアグラムからみられる。

#### ・ウッドチップ塔

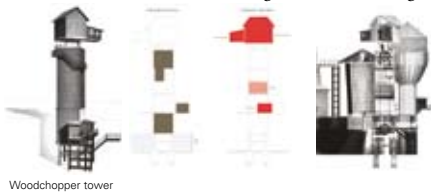


fig.7

fig.8

燻製においてウッドチップがフレーバーを大きく左右する。ここでは船によって運ばれてきた木をチップ状に加工する仕事が行なわれる。バスルームなどは作業場に近いうちに設置され、仕事と生活の位置関係が考えられている。ここの住人はその時の魚に合わせた木を選びウッドチップを作ることが仕事である。断面図より書斎が作業場の真ん中にあることが分かる。

ここの住人はその時の魚に合わせた木を選びウッドチップを作ることが仕事である。断面図より書斎が作業場の真ん中にあることが分かる。

#### ・燻製塔



fig.9

最終的に全ての処理を終えた魚、ウッドチップがここに運ばれてきて燻製される。自宅の煙突は燻製所の煙突に直結しているため、日常行為の延長線上で燻製を行うことができる。住人は火の管理を仕事とする。

住人は火の管理を仕事とする。

#### これからの住宅の公共性

ケーススタディーを通して今後の住宅の在り方を見てきた。ここで示した例は“公共”と銘打った使われない広場や公園などに対する批判のメッセージも込めている。公共性のある場所を皆が平等に使用する、というのは目指すべき社会の姿であることは大いに賛成できる。しかし安易に公共という名を使い、場所、空間をデザインしない言い訳にすることが多々あることに遺憾を感じる。建築家の仕事は建築物のデザインだけではなく、人々に新しい価値観をもたらすものでもあると私は自負している。今までの考えでは“空間・場所自体が公共性を持つ”と考えられがちであったが、これからの住宅は“建築が住人に公共性を持たせることができる”ということはこの論文でケーススタディーを通して示したかった。そしてまた本当の公共性というものが人々の中になく限り、いくら公共性を持った場所があろうともそれらの場所は思い描かれた通りには使用されないのである。

ケーススタディーが与え得る誤解があるとすればそれは住宅と職場の一体化が住宅に公共性をもたらす、ということである。あくまでこれは一つの例であり、必ずしも住宅が住宅以外の用途を担う必要があるわけではない。例えばあるまとまった数の住宅があるとする。それぞれに庭があり野菜を作ることにする。A宅はトマト、B宅はきゅうり、C宅はニンジンなど別々の野菜をつくってある一定のコミュニティーの中で交換する。

つまり大切なことは“ルールと役割”なのである。ある一定のルールの中でそれぞれが役割を持つ。個人が役割を持つということは個人の存在意義が増す。個人の公共性を増すことで社会全体の公共性を確立していく。役割を持つことで自分に責任が生じることを嫌う人々も多くいると思われる。また、この考えはある一種のユートピア的思想であるとも指摘されるかもしれない。しかしどうしてもこのようなコミュニティーに参加し、自分の居場所を探したいと思っている人が少なからずいるであろうという考えを私は拭い去ることができないのである。参加したくない人の参加は強制しない。しかし、人々の中に潜んでいる公共性を建築を通して伸ばしていくのが建築家としてできる提案なのではないか。もし多くの人々が公共性を宿し公共性のある社会を作っていけばいつかそれが主流となる日が来るかもしれない。その時初めて街中の公共スペースがみんなでも埋め尽くされるかもしれない。公共性は与えられるものではなく自分達の中に育てていくもの。それが社会全体を支えるのである。

#### 使用した図のタイトル及びソース

- ・ figure1: 東京R不動産 大型シェア物件シリーズ フレンズ シーズン2 一階平面図 [http://www.realtokyoestate.co.jp/estate\\_data/1174369618\\_p\\_src.jpg](http://www.realtokyoestate.co.jp/estate_data/1174369618_p_src.jpg)
- ・ figure2: トリニティー・ホスピタル テムズ川沿いの風景 著者撮影及び編集
- ・ figure3: 5つの塔の燻製所、北面立面図 著者作成
- ・ figure4: 魚塔外観及びダイアグラム 著者作成
- ・ figure5: 給水塔外観及びダイアグラム 著者作成
- ・ figure6: 塩貯蔵塔外観及びダイアグラム 著者作成
- ・ figure7: ウッドチップ塔外観及びダイアグラム 著者作成
- ・ figure8: ウッドチップ塔断面図 著者作成
- ・ figure9: 燻製塔外観及びダイアグラム 著者作成